

お雇い教師の歴史像をめぐる考察

加藤 詔 士 (法学部教授)

1. 辞書・事典のなかのお雇い教師

(一)

お雇い教師の歴史的意義が認められ、辞書・事典の見出し語に採録されている。見出し語に採用されることは、その項目が大きな意義を有していることについて社会的に認知されたことを物語る。しかも、辞書・事典における説明・記述は、当該分野における標準的な見解とみなされるだけに、そのお雇い教師理解は注目される。

辞書・事典において、お雇い教師は日本教育の近代化ならびに自立化という期待に応えた職務をになった外国教師、と理解されることが多い。

たとえば、『広辞苑』の最新版(2008, 第6版)では、

「【御雇外国人】明治前半を中心に、政府が先進国の学芸・技術・制度を摂取するために官庁や学校に招いた欧米人。ボアソナード・ベルツ・フェノロサ・コンドル・モースなど。」

とある。『大辞林』(2006, 第3版)においても同様である。

「【御雇外国人】幕末から明治前期、欧米の学問・技術・産業・政治制度などを急速に取り入れるため政府が雇った外国人。アトキンソン(英)・ボアソナード(仏)・ベルツ(独)・クラーク(米)・ロエスレル(独)などが有名。」

『明治時代史大辞典』(2011)の場合も、

「御雇い外国人 明治時代前半期、西洋の科学技術ならびに文化を導入する目的で政府および府藩県が雇傭した外国人をいう。『御雇い外国人』という呼称は、その当時の日本政府が実際に使用していたものであり、同様の政府の表現には『御雇い教師』『御雇い汽船』などがある。」

と説明されている⁽¹⁾。

そのなか、『新版 現代学校教育大事典』(2002)には、下記のように、お雇い教師を含めたお雇い外国人の字義、明治新政府による近代化方策、お雇い教師の歴史的意義などについて、幅広い視点にたった説明がみられ示唆的である⁽²⁾。

「御雇教師 日本の開国をめぐって西洋列強がせめぎ合い、その主導権争いをする中で、明治新政府は、かなり主体的に『国選び』をして、当時におけるトップレベルの科学や技術を導入する条件に恵まれたため、みずから経費を支出して多数の西洋人を雇い入れ、日本の近代化に貢献させる方策を採用した。日本側が給料を負担して外国人教師を雇い、一定の役割を遂行してもらうという慣行は、すでに幕末期に成立していた。・・・

維新後の新政府は、この方策をさら

に強化して、宗教を除く、政治・経済・軍事・医療・教育などのすべての分野において外国人を雇い入れ、指導にあたらせた。その際、工業はイギリス、法律はフランス、医療はドイツといった、巧みな国選びがなされた。このようにして雇われた外国人を『御雇外国人』と称する。府県や民間人が雇い入れた者もその中に含まれるため、その総数は明治全期をとおして3,000人に達すると推定されている。

御雇外国人のうち、特に教育に関係した者を『御雇教師』と称するが、その区別は明確ではない。・・・

御雇教師は、日本政府の要請に応じて各種の建言をしたり、西洋式の学校を組織したり、西洋の学芸を教授したり、母国へ留学生を斡旋したり、日本の事情を西洋に紹介したりして、日本教育の近代化と国際化に貢献した。また、日本人学生をかれらの後継者に育て上げることによって、日本教育の自立化にも寄与した。その自立化の始まる明治20年代以降、御雇教師の数は減少していった。・・・」

(二)

辞書・事典における説明には、注目すべき点が二つある。第一は、政府が明治前半期に招いた外国人という理解が多いことである。しかしながら、府県あるいは民間が招いた外国人も、また明治中期以降に招いた外国人教師も、政府雇いに比べれば数は少ないとはいえ、重要な役割を果たしたこ

とを忘れてはならない。

近代日本の教育に関与した外国教師の果たした役割については、三好信浩『日本教育の開国、外国教師と近代日本』において「系統的に整理」⁽³⁾されている。同書で指摘されているように、「明治維新後、地方の府・藩・県の中には、中央に先がけて外国教師を雇い、近代学校を組織化するところがあらわれ」、多くの場合、ここに外国教師が雇い入れられた。かれら「地方教師は、さまざまな形で地方の文化や産業や教育の近代化に貢献した」⁽⁴⁾。京都のR. レーマン (Rudolph Lehmann, 1842-1914) やL. デュリー (Léon Dury, 1822-1891)、大阪のK. W. ハラタマ (Koenroad Wolter Gratama, 1831-1888) やC. J. エルメリンス (Christian Jacob Ermerins, 1842-1880)、福井のW. E. グリフィス (William Elliot Griffis, 1843-1928)、金沢のP. J. A. スロイス (Pieter Jacob Adrian Sluys, 1833-1913)、静岡のE. W. クラーク (Edward Warren Clark, 1849-1907)、熊本のL. L. ジェーンズ (Leroy Lansing Janes, 1838-1909)、弘前のJ. イング (John Ing, 1840-1920) などの活躍が知られている⁽⁵⁾。

「実学人材の養成が課題となった近代日本では、まずは医学、工学、農学などの応用科学が重要視され、その基礎となる自然科学の教授はそれよりおくれて・・・開始された」。その「自然科学に比べると、人文科学や社会科学の外国教師の雇い入れは、時期もおくれ人数も少ない」⁽⁶⁾。ただし、そのなかには、E. ハウスクネヒト (Emil

Hausknecht, 1853–1927) や L. リース (Ludwig Riess, 1861–1928) のように、日本における教育学や歴史学の始祖となったお雇い教師も含まれており注目される。ハウスクネヒトは1887(明治20)年に来日し、帝国大学文科大学において教育学教育を担当し、「日本の大衆初等教育の近代化を支える教授理論の導入者」、ならびに「日本の公教育の画一化・定型化を促すドイツ教育理論の紹介者」としての貢献が認められる。リースも同じく1887年に招聘され、帝国大学文科大学において歴史学を講じた。国史学科を創設したほかに、「1889年リースの建言により史学会が設立され同年12月機関紙『史学会雑誌』が創刊され、のち『史学雑誌』と改題され現在に至っている」⁽⁷⁾のことが特筆される。

自然科学においては、明治中期以降になってもなお、あらたな高等専門教育については当該分野のモデル国から外国教師が招かれた。たとえば、衛生工学や造船学の場合がそうである。都市化が進み環境衛生の問題が発生するなか、1887年には、帝国大学工科大学に日本最初の衛生工学講座が開設され、ここに W. K. バルトン (William Kinninmond Burton, 1856–1899) が招かれた。かれは衛生工学を教授するとともに、各地の上下水道の設計・改良を指導した。それより10年以上ものちの1898年、造船学の専門化が進むなか、東京帝国大学工科大学の造船学教師として、P. A. ヒルハウス (Percy Archibald Hillhouse, 1869–1942) が招聘された。さらにヒルハウス

の後任の F. P. パービス (Frank Prior Purvis, 1850–1940) も招聘され、船舶の設計製図教育を担当している⁽⁸⁾。いずれも当該分野のモデル国であった英国からの招聘である。

辞書・事典における説明・記述で注目すべき第二は、日本滞在中に果たした諸活動に関心が集まっているが、それに加えて、日本から帰ってからの活動についても視野に入れるべきであろうということである。一般にお雇い教師は任務が終了するか、あるいは満期を迎えれば解約される、一時的な学術文化の伝来者である。任務の終了ないし満期解約になれば、母国に戻った事例が多い。同じ来日外国人であっても、古代の帰化人とは違うこの特性に注目すれば、お雇い教師の帰国後の活動については検討すべき重要な課題となる。

しかも、母国では日本での見聞や体験を生かした活動を展開したであろうし、日本との関係を活用した活動をなし、日本との交流の促進に寄与したにちがいない。お雇い教師は日本教育の「近代化」ならびに「自立化」を促進しただけでなく、日本教育の「国際化」にも寄与したのである。

本稿は、このうち第二の点に着目し、主として「帰国後のお雇い教師」をめぐって分析することの重要性を指摘し、あわせて具体的に分析するさいの視点と項目について考察する。

2. お雇い教師の職務と功績

1) 期待された職務

(一)

お雇い教師は、日本側の求めに応じて多種多様な活動をした。大別すると三つある。

①西洋の科学・技術の教育、②学校の組織と管理、③為政者への献策、の三点である。

①は教師として、②は教頭として、③は顧問としての活動である⁽⁹⁾。

お雇い教師は、こうした三大職務の遂行をとおして「日本教育の近代化」に貢献した。また、日本人学生の後継者を育てあげることによって、「日本教育の自立化」にも寄与した。

まず、日本教育の近代化に貢献した活動は、具体的には、①専門教育の組織化、②国民教育の組織化、③女子教育の近代化、④地方教育の近代化、に分けられる。①専門教育の組織化とは、各省の専管する専門教育機関だけでなく、公立や私立の専門学校において、その「編制や教授の仕事」を任され、洋学を身につけた実学人材の養成にあたったことである。東京開成学校のG. H. F. フルベッキ (Guido Herman Fridolin Verbeck, 1830-1898)、東京医学校のL. B. C. ミュルレル (Leopold Benjamin Carl Müller, 1824-1893) とT. E. ホフマン (Theodore Eduard Hoffmann, 1837-1894)、工部大学校のH. ダイアー (Henry Dyer, 1848-1918)、札幌農学校のH. ケプロン (Horace Capron, 1804-1885) とW. S. クラーク (William Smith Clark,

1826-1886)、司法省法学校のG. E. ボアソナード (Gustave Emile Boissonade de Fontarabie, 1825-1910) などが、有名教師として知られる⁽¹⁰⁾。

②国民教育の組織化とは、欧米諸国の教育制度をモデルにして明治5年8月に「学制」という近代教育法が制定されると、これを実効あるものにして「国民教育の充実」がはかられたが、これにお雇い教師が関与した。日本の国民教育を組織化するための計画立案に助言を与えたD. マレー (David Murray, 1830-1905)、師範教育の創業に寄与したM. M. スコット (Marion McCarrell Scott, 1843-1922)、唱歌教育および体操教育において「東西文化を調和させたり折衷させたりする」課題に立ち向かったL. W. メーソン (Luther Whiting Mason, 1818-1896) とG. A. リーランド (George Adams Leland, 1850-1924) が、その代表例である⁽¹¹⁾。

③「女子もまた、男子と同じように学校教育を受けるべきだ」というあたらしい女子教育観の形成にも、外国人教師が「大きな役割を果たした」。「とくに、ミッション系の宣教師たちは、みずから女学校を組織してその範例を示した」。横浜で英語塾 (のちのフェリス女学院) を開いたミス・キダー (Mary Eddy Kidder, 1834-1910)、神戸で私塾 (のちの神戸女学院) を開いたミス・タルカット (Eliza Talcott, 1836-1911) とミス・ダッドレー (Julia Elizabeth Dudley, 1840-1906)、長崎で女学校 (のちの活水女学校) を開いたミス・ラッセル

(Elizabeth Russell, 1836-1928) などの活躍が知られている。

また、「官公立の女学校も組織され、小学校をこえた水準の教育」もおこなわれるようになるが、ここにもお雇い教師が「雇われて教育を担当した」。女子教育の組織化というより、「英語をはじめ、西洋の近代的教科を教え」ることで女子教育の近代化に寄与した。官立では東京女学校ならびに開拓使女学校、府県立では京都府の新英学校ならびに女紅場に、外国人女教師が雇い入れられている⁽¹²⁾。

④明治維新後、地方の府・藩・県のなかには、とくに中学校や専門学校にお雇い教師を招いて、近代学校の組織化を図ったところがある。かれらは教育だけでなく、さまざまな形で地方の文化や産業の近代化にも貢献した。前出のように、京都のR. レーマン、大阪のK. W. ハラタマやC. J. エルメリンス、福井のW. E. グリフィス、金沢のR. J. A. スロイス、静岡のE. W. クラーク、熊本のL. L. ジェーンズなど、枚挙にいとまないほどである⁽¹³⁾。

(二)

日本人学生の後継者を育てあげることによる「日本教育の自立化」という貢献については、工学教育の自立化が好事例となる。お雇い教師は工学のほかにも医学、法学、農学、商学など数多くの分野において、日本人材の育成にあたり後継者を育てあげたが、そのなかでも明治新政府は工業立国を目指し、英国をモデル国とした工業化を進めただけに工学教育の自立化への貢献が

注目される。明治5(1872)年の段階で、各省における官備外国人213名のうち、工業技術の近代化を専管する工部省雇いは153名、英国人は119名を数えた。119名の英国人のうちの104名は工部省雇いであった⁽¹⁴⁾。

工学の専門教育は、英国人のお雇い教師を招いて、工部省の所管のもと、工学寮ならびに工部大学校という工学専門教育機関で始まった。明治6年6月のことである。明治18(1885)年に工部省の廃省にともなって文部省に移管されるまでの13年間に、工部大学校の卒業生は合計211名を数えた。帝国大学工科大学に切りかわったのち、帝国大学に編入した者のうち17名が明治19(1886)年7月に帝国大学一期生として卒業した。かれら卒業生は、教育および工業の両分野において「大きな貢献をした」。

まず、教育の分野においては、工部大学校の「多数の卒業生が工部大学校の後身である帝国大学(一八九七年以降は東京帝国大学)において、イギリス人教師に代わって後進の指導に従事し、その後工業教育機関が拡張するに伴ない高等工業学校などの教職に従事する者がふえた」⁽¹⁵⁾。

たとえば、第一に、工部大学校の第1回卒業生23名のうち、成績優秀者11名が官費留学生として選抜され、1880年2月に横浜を出帆して工部大学校お雇い教師の母国である英国に学んだ⁽¹⁶⁾。3年間の留学を終えて帰国後は、教育および工業の二分野で活動した。

第二に、上記の卒業生のうち、母校であ

る帝国大学とそれの改称した東京帝国大学の教授職を務めた者は14名のほり、そのうち、辰野金吾（第1回卒業生）は東京帝国大学工科大学学長、真野文二（第3回卒業生）は九州帝国大学総長、田辺朔郎（第5回卒業生）は京都帝国大学工科大学学長の役職を、それぞれ務めた⁽¹⁷⁾。

第三に、「各地に高等工業学校が設けられるとその初代校長となる者も出た」。小花冬吉（第1回卒業生）は秋田鉱山専門学校の、中原淳蔵（第3回卒業生）は熊本高等工業学校の、大竹多気（第5回卒業生）は米沢高等工業学校ならびに桐生高等染織学校の、初代校長についている⁽¹⁸⁾。

工業の分野においては、「卒業生の多くは、工部省の進める国営工業に従事し、イギリス人教師に教えられた近代技術を定着させることに寄与した」。たとえば、前出の1880年派遣の英国留学生のうち、南清は鉄道事業で、石橋絢彦は燈台建設ならびに海上工事で、三好晋六郎は造船事業、荒川新一郎は紡織事業、志田林三郎は電信事業、辰野金吾は建築設計、高峰讓吉は化学工業、小花冬吉は製鉄事業、栗本廉は鉱山事業で、それぞれ活躍した。「その後、日本の産業革命が進み、民間会社が発達するとその技術的リーダーとなる者がふえた」⁽¹⁹⁾。

2) 予期せぬ派生效果

お雇い教師は日本側の求めに応じて「教育の近代化」ならびに「教育の自立化」に貢献したのだが、かれらの功績はこれだけにとどまらなかった。実は「日本側がさほ

ど明瞭に期待していなかった、派生的・付随的な効果が生み出されたのである」⁽²⁰⁾。

その一は、滞日中、お雇い教師の職務を遂行する過程で派生した諸活動であって、教育の職務を効果的に進めるための調査研究、ならびに本務の余暇を利用した研究の遂行がそれである。日本の自然・風土・美術工芸などを対象にした研究の場合は、その成果の発表をとおして世界への日本紹介を促進した点で注目される。

その二は、帰国後に、日本における見聞・体験を生かしておこなった諸活動であって、日本人留学生の支援、日本美術工芸品の収集と展覧による日本紹介、日本政府のいわばコンサルタントとしての支援など、母国と日本との間の交流を推進する活動である。教育の枠をこえた広い分野で活躍し、日本へ支援をなした教師も少なくない。

滞日中であれ帰国後であれ、求めに応じて他のお雇い教師を紹介・推薦したことで、日本教育に貢献したお雇い教師も何人かいる。これも、当初は期待されていなかった功勞として注目される。日本での教師経験がある者、あるいはわが国と縁故のある信頼に足る外国人の紹介・推薦にもとづいて、雇い入れられた事例はいくつも認められる。後述するとおりである。

お雇い教師をめぐる研究には、滞日中の活動、なかでも前出の三大職務をめぐる考察が重要であるが、それだけにとどまらず、帰国後の諸活動についても考察を深めることは、お雇い教師の歴史像の再構成につながると思われる。滞日中に自国向けの活

動をなす者，帰国後も日本との関係・交流を継続する者もいたのだから，これらの局面についての考察もまた欠かすことはできない。

3. 帰国後のお雇い教師の活動—個別具体的な事例—

(一)

帰国後のお雇い教師の活動は，具体的にどのようなものがあったのか。これまでの研究によると，数々の事例が知られている。

たとえば，札幌農学校の初代教頭W. S. クラーク (William Smith Clark, 1826-1886) は「アメリカ各地で日本に関する講演を行なった」し，同校植物学教師D. P. ペンハロー (David Pymouth Penhallow, 1854-1910) は「日本の植物やアイヌ研究に従事し論文を発表した」。工部美術学校の彫刻学教師V. ラグーザ (Vincenzo Ragusa, 1841-1927) は「故郷シチリア島パレルモ市に帰り，日本で収集した美術工芸品の展覧会を開催」した。東京医学校のドイツ語・フランス語・数学教師R. ランゲ (Rudolph Lange, 1850-1933) は「日本文化および日本語の研究家として知られた」。横須賀造船所の技師L. E. ベルタン (Louis Emile Bertin, 1840-1924) は，日本関係の著作のほかに「一時日仏協会会長を務めるなど日仏親善にも貢献した」。北海道開拓使顧問であったH. ケプロン (Horace Capron, 1804-1885) の場合は，帰国後も「開拓使から仕事を依頼されている。西南戦争の際には，黒田〔清隆—引用者〕

の依頼で，ガットリング機関銃やレミントン製ライフル銃などの武器弾薬を調達した。戦中には，缶詰製造の技術者の人選を依頼されたり，戦後は，三エーカーの地所に植えるホップの苗とホップ栽培の書物の購入を頼まれたりした」。司法省法学校のお雇い教師G. H. ブスケ (George Hilaire Bousquet, 1846-1937) になると，「フランス大蔵省税関総監兼参議として，日本酒の関税率を引き下げたり，パリ万国博への出品に便宜をはかるなど好意的な処置を講じた」ことが，勲二等の叙勲上申書のなかに記されている⁽²¹⁾。

(二)

お雇い解除になり帰国してからもなお，日本との関係を保ち続け，日本との交流を推進した一人にH. ダイアーがいる。スコットランドから招かれたお雇い教師であって，明治6 (1873) 年6月から15年6月まで工部省に雇われ，工学寮ならびに工部大学の都検ならびに土木・機械工学教師として，日本の工学教育とその組織化を主導した。かれの帰国後の活動は多面にわたる⁽²²⁾ が，大きく(1)日本からグラスゴウへの教育文化還元活動と，(2)グラスゴウを拠点とした日本支援活動に分けられる。

(1)については，①グラスゴウの技術教育の改革，とりわけグラスゴウ・西部スコットランド技術カレッジの再編 (工部大学校における教育実践にもとづいた同カレッジの教育課程・学科編製の整備)，ならびに②日本事物の紹介宣伝，とりわけ日本美術工芸品等の持ち帰りと展示・紹介がある。

具体的には、①工部大学校における専門学の学科課程の編制と授業科目の開設，工学実験室の整備，学理と実地を結合した教育方法を，グラスゴウ・西部スコットランド技術カレッジに移植したし，②図書・冊子類，巻物・軸物・木版画などという美術工芸品，楽器類，写真・絵葉書類を主たる内容とする，大量かつ多彩な日本事物を持ち帰った。近年，それら「ダイアー・コレクション」が展覧に供されることをとおして，日本紹介と日英交流を増進した点で注目される⁽²³⁾。

(2)については、①明治政府の帝国財務及工業通信員の囑託と日本の経済・財政事情の英国への紹介，②お雇い造船学教師 P. A. ヒルハウスの推薦と紹介，③日本研究を深め日本事情通として西洋への日本紹介に寄与したことが，注目される⁽²⁴⁾。

具体的にみると、①の帝国財務及工業通信員とは、「本邦財政経済ニ関スル事項ヲ新聞雑誌ニ掲載シ又ハ其他ノ方法ヲ以テ一般外国市場ニ知ラシメ及ヒ外国ニ於ケル情況ヲ時々報道スルコト」を主務とするものであって、ダイアーは明治35年3月に任命された。日本の財政事情のほか、商業道德の向上、外国と対等になることを熱望する国民性などについての論稿を発表ないし講演したことで、日英関係の促進ならびに世界への日本紹介に貢献した⁽²⁵⁾。

②明治30年5月に始まった東京帝国大学工科大学造船学教師の人事選考のさい、ダイアーが推薦した P. A. ヒルハウス

が選任された。造船学のなかでもとくに商船の「設計製図教育」という、専門教育を担当しうる適任の人材を得ることは「頗る困難」であったが、そのなか依頼を受けたダイアーは、グラスゴウ大学卒業後、グラスゴウ市内の造船所で船舶の製図ならびに製造という実務についていたヒルハウスを素早く見だし推薦した。お雇い教師は、自身が教壇に立って日本教育の推進に関与しただけでなく、他の外国人教師の人事選考に関与することをとおしても、日本教育の進展に貢献した好例として注目される⁽²⁶⁾。

③日本研究は、19世紀末から世界における日本関心が高まり、しかも日英間の協調が一段と進展するなか意欲的におし進められた。日本の経済社会、工業教育、商業教育、修身教育という個別主題についての諸研究、あるいは『大日本 (*Dai Nippon*) 』(1904) や『世界政治のなかの日本 (*Japan in World Politics*) 』(1909) という総合的な日本研究をとおして、英国はもちろん世界への日本紹介に寄与したことも注目される⁽²⁷⁾。いずれも、9年余におよぶお雇い教師としての日本体験ならびに深い日本理解にもとづいた日本研究である。

4. 帰国後のお雇い教師の活動－『来日西洋人名事典』に見られる諸相－

1) 『来日西洋人名事典』のなかのお雇い教師

帰国後のお雇い教師の活動状況については、個別具体的な様相だけでなく、総体的

な様相を分析し体系的に考察することが重要である。以下では、武内博編著『来日西洋人名事典』における記述内容を素材にして、帰国後のお雇い教師がなした諸活動の全体像を考察する。

同書は、「原則として戦国時代から大正時代に来日した西洋人を中心に」、初版ではのべ1303名を収録し、増補改訂版にはさらに「170名ほど」が新規に収録されている⁽²⁸⁾。のべ1473名にのぼる。収録された来日西洋人のなかには、お雇い教師だけでなく、宣教師、外交官、旅人、漂流者なども含まれ、各人の国籍、活動分野（所属、肩書、専門など）、略伝、関連文献などが簡潔にまとめられている。

お雇い教師を含めた来日西洋人1473名という数は、ユネスコ東アジア文化研究センター編『資料御雇外国人』所収の「お雇い外国人名鑑」の2299名（中国国籍253名なども含む）⁽²⁹⁾には及ばないけれども、これほど網羅的なこの種の人名事典はほかに見当たらない。すべてのお雇い教師を漏れ落ちなく把握することはできなくても、収録されたお雇い教師の主たる活動内容と特色は簡便に把握することができる。

2) 来日西洋人の活動ステージ

『来日西洋人名事典』に収録されている来日西洋人1473名の活動の記述を分析すると、彼らの活動はさまざまな局面におよんでおり、注目すべき傾向が認められる。第一に、かれらの活動ステージは来日前、滞日中、帰国後の三期に分類される。また、

滞日中ならびに帰国後における活動の方向は、日本向けの活動と自国向けの活動にそれぞれ大別される⁽³⁰⁾。

第二に、日本における任務の終了後、自国に帰ってから諸種の活動（とりわけ日本関係の活動）をなした者のうち、幕末から明治時代の人物を抜き出してみると、別掲の資料①のようになる。全部で69名を数える。

同資料をもとに、帰国後に来日西洋人がなした日本向け活動を考察すると、①日本人留学生の支援、②人材のリクルート、③日本への支援、④日本研究・日本紹介に大別される。また、帰国後における自国向けの活動は、⑤講演活動、⑥教育活動、⑦研究活動、⑧日本事物の持ち帰り、⑨日本研究・日本紹介、⑩献策、といった諸活動に分類される。

滞日中の活動についても、日本向けの活動と自国向けの活動に大別される。滞日中の日本向けの活動としては、既述のように、①西洋の科学・技術の教育、②学校の組織と管理、③為政者への献策という三大職務のほか、④日本研究・日本紹介、⑤人材のリクルートに分類される。滞日中の自国向けの活動としては、⑥日本事物の収集・輸出、ならびに⑦日本研究・日本紹介に分けられる。

来日西洋人のこれらの活動を、滞日中ならびに帰国後という滞日前後のステージで区分し、これに活動の方向性を加えて整理してみると、資料②のように例示できる⁽³¹⁾。

3) 帰国後における日本向けの活動

来日西洋人の活動は実に種々の局面におよぶが、そのうち本稿の主題であるお雇い教師を選びだし、かれらの帰国後における日本向けの活動ならびに自国向けの活動について、大要を摘記すると下記のとおりである。

まず、帰国後における日本向けの第一の活動である①日本人留学生支援の事例として、4例ある。東奥義塾の英語教師J. イングは、教え子の珍田捨巳ならびに佐藤愛磨を、自分の母校アスベリー大学に紹介して学ばせた。長崎海軍伝習所教官W. J. C. カッテンディーケは、「約1ヶ年長崎で勝安房、榎本武揚等の海軍伝習生を育成した」が、オランダに帰国後も、「日本からの海軍留学生に幾多の便宜を与えた」。札幌農学校教師C. H. ピーボディは、帰国後マサチューセッツ工科大学で教えるが、「日本からも彼のもとで多くの留学生が学んだ」。長崎精得館、大坂医学校、大学東校の医学教師A. F. ボードインは、1866年9月長崎精得館での任期を終えて一時帰国するとき、「日本から緒方惟準、松本銚太郎の2人の留学生を伴った」⁽³²⁾。

②人材のリクルートについては、『来日西洋人名事典』にはお雇い教師の事例は記述されていないけれども、前述のように、工部省お雇い教師H. ダイアーは日本から帰国してグラスゴウに在住中に、求めに応じて東京帝国大学工科大学造船学教師としてP. A. ヒルハウスを推薦した⁽³³⁾。

③日本への支援・親善の事例としては、

前出のW. J. C. カッテンディーケはオランダ海軍が「幕府から『開陽丸』の注文を受けた際にはその斡旋に力を尽した」。同志社ならびに大阪梅花女学校のお雇い教師S. L. ギューリックは、「日米親善に多大の貢献を果たし」たが、なかでも「日米友情の『人形使節』として13000体のキューピッドをわが国に送った」ことが特筆される。京都府仏学校、開成学校、東京外国語学校などのお雇い教師L. デュリーは、「1877年帰国シマルセイユに居住したが、終生変わらぬ親日家として日仏親善のために尽力した」⁽³⁴⁾。

④日本研究・日本紹介については、数多くの例が認められる。たとえば、福井藩明新館ならびに大学南校のお雇い教師W. E. グリフィスは、「日本に関する講演や執筆活動をおこない多数の著作を発表し、またお雇い外国人の調査研究に専念した」⁽³⁵⁾。

長崎医学校のお雇い教師J. L. C. ポンペ・ファン・メールデルフォールトは、帰国後の1866年「日本滞在の見聞をまとめ“Vijf Jaaren in Japan”を刊行、『日本滞在見聞記』として翻訳されている」。東京外国語学校のロシア語教師L. I. メチニコフは、ジュネーブに帰ってから、「在日中収集した日本に関する資料をまとめ、1876年から1877年にかけて『明治維新論』を、1881年には『日本帝国』を刊行した」。東京大学の動物学教師E. S. モースは、著作として「“Japanese Homes and Their Surroundings” (1886) および“Japan Day by Day” (1917) などがあり、それぞれ日

本語訳されている」⁽³⁶⁾。

4) 帰国後における自国向けの活動

次に、お雇い教師の帰国後における自国向けの活動について、具体例をあげると下記のとおりである。

まず、⑤講演活動としては、札幌農学校初代教頭W. S. クラークは帰国後は「アメリカ各地で日本に関する講演を行なった」。北海道開拓使顧問H. ケプロンも、帰国後「日本に関する講演等を行なった」⁽³⁷⁾。

⑥教育活動としては、東京帝国大学の行政法ならびに政治学教師K. ラートゲンは、帰国後「ベルリン大学講師、マールブルク大学教授、ハイデルベルク大学教授等を歴任し、日本経済や財政に関する多くの著作を発表した」。東京帝国大学法科大学フランス法教師ならびに司法省法律顧問M. ルヴォンは、帰国後「パリ大学文科大学で日本文学や東洋史を講じ、1920年11月には同大学正教授に就任した」⁽³⁸⁾。

⑦お雇い教師は日本という異国で生活し任務を遂行しただけに、日本事物に関心を抱いてこれを研究し、その成果を著作として残した事例も数多く認められる。慶応義塾大学の英米法教師J. H. ウィグモアは、「著書も多く、特に日本法制史の資料編纂に多大の貢献を果たした。“Notes on Land Tenure and Local Institutions in Old Japan”(1890) および “Materials for the Study of Private Law in Old Japan”(1941) はわが国の法律を外国に紹介したことで記憶されるべき業績である」。静岡学問所ならびに

開成学校のお雇い教師E. W. クラークは、「帰国後日本での経験をまとめ“Life and Adventure in Japan”を刊行、さらに勝海舟の伝記“Katz Awa; the Bismarck of Japan or the Story of a Noble Life”(1904)を刊行した」⁽³⁹⁾。

横須賀造船所医師のP. A. L. サヴァチエは、「医師として忠実な仕事ぶりを示したが、植物採集にも関心を抱き日本産植物の研究にも貢献を果たした。A. ブランシェとの共著による“Enumeratio plantarum in Japonia sponte crescentium”(『日本に自生の植物目録』)がある」。東京大学理学部採鉱冶金学教師C. A. ネットーは、「著作として『日本鉱山編』や『涅氏冶金学・上』(1884)があり、ほかに日本に関するものも多く『日本の紙の蝶々』(1888)および『日本のユーモア』(1901)等がある」。司法省法学校教師G. H. ブスケの場合は、「在日中の経験をまとめた『日本見聞記』はすぐれた日本文化論として評価が高い」⁽⁴⁰⁾。

横須賀造船所技師L. E. ベルタンは、「日本関係の著作も多く、『日本の内乱』は1896年にアカデミー賞を授与された」。東京医学校、東京大学医学部、帝国大学医科大学の医学教師E. ベルツは、「日本文化の研究にも従事し、その詳細は『ベルツ日記』に明らかである。また脚気の研究や温泉の効用を発表した」。札幌農学校教師D. P. ペンハローは、帰国後「日本の植物やアイヌ研究に従事し論文を発表した」。海軍兵学校、東京商科大学、学習院、東京

帝国大学の英語教師F. H. リーは、「著作に“A Tokyo Calendar”(1934)および“Days and years in Japan”(1935)があり、いずれも北星堂書店から刊行された」。C. L. ブラウネルの場合も、帰国後に日本での体験を生かした好例である。彼は1886年に来日して早稲田大学ならびに富山県立富山中学校で英語を教えた。滞日5年にして帰国したが、「日本に関して多くの論文や著作を著し、1903年には大英博物館のために日本歴史に関する仕事に従事した」⁽⁴¹⁾。

⑧日本事物を母国に持ち帰り、あるいは日本人を連れ帰り、日本紹介に貢献した事例もある。たとえば、大蔵省印刷局において紙幣の図案製作に従事したE. キヨソネは、故国に戻ることなく東京の自宅で死去したが、「死に臨んで、彼が収集した1万4000点におよぶ日本美術コレクションは、故郷ジェノバ市のアカデミア・リグリステイカに寄贈され、キヨソネ博物館と改名されて一般に公開された」。また、工部省工部美術学校の彫刻学教師V. ラグーザは、「1882年8月漆工の清原英之助夫妻および清原玉女を伴って故郷シチリア島パレルモ市に帰り、日本で収集した美術工芸品の展示会を開催したりした」。1884年には「パレルモ市に私費を投じて工芸学校を創立してその校長に就任。清原英之助を漆工科の指導者として日本のウルシ技術の移植を図った。同校はのちパレルモ市立となり、ついで高等美術工芸学校へと発展した」⁽⁴²⁾。

⑨日本研究・日本紹介としては、第一

高等学校ドイツ語教師W. グンデルトは、「内村鑑三の研究家でもあり、さらに能や狂言等日本文学古典の紹介につとめた。1960年に刊行した『碧巖録』のドイツ語訳は高く評価されている」。富岡製糸場技師P. ブリューナは、「『TOMIOKASILK』の名を世界にひろめ、製糸をわが国最大の産業に育成した功績は大きい」。前出の東京帝国大学法科大学フランス法教師M. ルヴォンは、「多くの著作があるが、『日本文芸抄』(1910)はヨーロッパへのわが国の文学紹介に多大の貢献を果たした」⁽⁴³⁾。

⑩日本における職務の体験を生かして、母国ないし郷里において政策提言をなした事例もある。まさに日本からの逆影響である。工部大学校都検として工学教育の組織化を先導したH. ダイアーは、「帰国後は日本研究や日本での工部大学校での経験を生かし、グラスゴー・アンド・ウェスト・オブ・スコットランド工科大学の建設に参加した」⁽⁴⁴⁾。

5. 滞日中の活動—自国向け活動と日本向け活動—

(一)

お雇い教師の歴史像の再検討というなら、帰国後の活動についてだけでなく、滞日中の活動（日本向けの活動および自国向け活動）についても、とうぜん詮索し検討すべき課題がある。

まず、滞日中の日本向けの活動は、既述のように、①西洋の科学・技術の教育⁽⁴⁵⁾、②学校の組織と管理⁽⁴⁶⁾、為政者への献策

(47) という三大職務のほかに、④日本研究・日本紹介、⑤人材のリクルートという活動に大別される。このうち、④および⑤は「日本側がさほど明瞭に期待していなかった、派生的・付随的な効果が生み出された」⁽⁴⁸⁾だけに、注目される。

④日本研究・日本紹介の事例として、『来日西洋人名事典』にはいくつか言及されている。たとえば、大阪造幣寮の化学および冶金学教師W. ガウランドは「在日中古墳の研究をおこない『日本考古学の父』と呼ばれ、また登山を好み日本アルプスの命名者としても知られている」。生野鉦山技師F. コワニエは「在日中に、『日本鉦物資源に関する覚書』(1874)を公表、ヨーロッパ人としては初の日本の鉦山に関する研究書として評価が高い」。慶応義塾大学理財科講師G. ドロップァーズは、「日本経済史に関心を抱き在日中『徳川時代に於ける日本の人口』と『日本に於ける信用組合の創立者』の著作がある」。東京帝国大学ならびに東京高等師範学校のお雇い教師E. F. フェノロサの場合は、政治学ならびに経済学などの教育を担当するかたわら、「日本美術にも深い関心」をもった。「とくに日本画の衰退を嘆き・・・古画の研究に没頭」し、「法隆寺の夢殿本尊(救世観音)を始めて世に出した」。そのほか、「能の英訳を行ない世界に紹介した」⁽⁴⁹⁾。

⑤人材のリクルートについても、日本での教師経験があり信頼に足る外国人、あるいはわが国と縁故のある外国人の紹介・推薦でもって招聘された数々の事例が含まれ

ている。別掲の資料③にまとめたように、17例を数える。

このうち、お雇い教師の人選は12例にのぼる。札幌農学校のJ. C. カッター、大学南校のE. クニッピン、静岡学問所および大学南校のE. W. クラーク、警視庁顧問P. G. グロース、大学南校E. コルンズ、横須賀造船所医師のP. A. L. サヴァチュ、札幌農学校のW. ホイラー、第1大学区第1番中学ならびに開成学校のD. B. マッカーター、長崎精得館等の医師C. G. マンスフェルト、工部省お雇い技師A. T. L. R. ムルデル、東京帝国大学のT. C. メンデンホールならびにE. F. フェノロサの諸氏である⁽⁵⁰⁾。

(二)

滞日中にお雇い教師としての本務を遂行するかたわら、自国向けの活動をなした事例もあり、内外交流の推進という観点から注目される。具体的には、⑥日本事物の収集・輸出、⑦日本研究と日本紹介といった活動である。

まず、⑥日本事物の収集・輸出については、園芸植物を採集した英国人R. フォーチュン、日本産貝類を採集したドイツ人J. J. ラインが知られている。フォーチュンは1861年、「主として園芸植物を採集。さらに琉球諸島にも上陸し珍しい植物を採集して母国に送った。・・・1863年ロンドンで刊行された“Yedo and Peking”は有名である」。ラインは「1873年来日し各地を旅行し、日本の地理・産業を詳細にわたって調査した。この結果“Japan nach

Reisen und Studien”を刊行した。さらに滞日中に日本産貝類を採集し、その研究をおこなった⁽⁵¹⁾。

両名ともお雇い教師ではないが、彼らと類似の活動をしたお雇い教師は少なくない。

『来日西洋人名事典』には明記されていないが、大蔵省紙幣寮雇いのE. キヨソネは滞日中の明治15年、「蒐集していた日本の楽器をミラノ市の万国楽器博物館に寄贈した」し、海軍軍医学校教師W. E. アンダーソン (William Edwin Anderson, 1842-1900) のように「日本の美術品(絵画, 彫刻, 漆器, 陶器など)を集めて研究し、その価値を世界に知らしめることに努めた」者は多い⁽⁵²⁾。名古屋藩洋学校, 東京外国語学校, 司法省明法寮のお雇い教師P. J. ムリエ (Pierre Joseph Mourrier, 1827-?) の場合は、日本の蚕書を含む書籍ならびに地図を収集し、一部を翻訳してフランスに送り、同地の養蚕技術の改良ならびに日本学研究の進展に寄与したことが知られている⁽⁵³⁾。

⑦日本研究・日本紹介の事例としては、たとえば、司法省法律顧問ならびに司法省法学校教師V. G. アペールは、1879年11月から1889年1月に至る約8年2ヶ月の滞日中、「フランス法等を教授し、わが国法学教育のために尽力した」が、「さらに日本の法律制度の研究や日本文化の紹介等わが国文化の恩人といえる。1888年に刊行した“Ancien Japon”はそれの集大成である」。同志社で神学を、京都帝国大学で比較宗教学を、大阪梅花女学校では英語をそれぞれ

教えたS. L. ギューリックは、「この間日本に関して多くの著述を刊行した。とくに日本人の国民性を考察した“Evolution of the Japanese; Social and Psychic” (1903) は多くの反響を得た」⁽⁵⁴⁾。

6. むすびーお雇い教師像の再構成ー

(一)

お雇い教師は日本教育の近代化および自立化という期待に応える職務を果たした外国教師、と理解されることが多い。当該分野における標準的見解が示される辞書・事典には、そのような説明がみられる。

しかし、かれらは任務を終えたら母国に戻る一時的な学術文化の伝来者であるという特性に着目すれば、日本での体験・見聞をもとにした帰国後の活動についてもまた、分析すべき重要な課題と思われる。

(二)

お雇い教師は、日本側の求めに応じて多種多様な援助をなした。西洋の科学・技術の教育、学校の組織と管理、為政者への献策という三大職務の遂行をとおして「日本教育の近代化」に貢献したことは、周知のところである。日本人の後継者を育てあげることによって、「日本教育の自立化」に貢献したことも知られている。

それだけでなく、お雇い教師研究を深めるには、当初は予期されなかった派生効果についても注目する必要がある。とりわけ帰国後における活動、さらには滞日中における自国向けの活動は「日本教育の国際化」という点で注目される。帰国後であれ滞日

中であれ、日本とのコネクションを生かした両国の交流の促進に貢献したはずである。

(三)

武内博編著『来日西洋人名事典』(1995)という来日西洋人の総合人名事典を素材にして、そのなかからお雇い教師を選びだし、彼らの帰国後における諸活動を分析すると、彼らの活動はさまざまな局面におよび、注目すべき傾向が認められる。

第一に、かれらの活動のステージは来日前、滞日中、帰国後の三期に分類される。また、滞日中ならびに帰国後の活動の方向は、日本向けの活動と自国向けの活動にそれぞれ大別される。第二に、帰国後における日本向けの活動は日本人留学生の支援、人材のリクルート、日本への支援、日本研究・日本紹介に大別される。第三に、帰国後における自国向けの活動としては、講演活動、教育活動、研究活動、日本事物の持ち帰り、日本研究・日本紹介、日本体験にもとづく献策、といった諸活動に分類される。これらの活動は、日本と母国との交流の促進、あるいは「日本教育の国際化」の増進という点で注目される。

お雇い教師をめぐる研究は、管見のかぎり、滞日中の活動、なかでも三大職務をめぐる考察が多いように思われるが、それだけにとどまらず、上記のような帰国後の諸活動、さらには滞日中の活動のなかでも自国向けの活動についても分析を深めることは、お雇い教師の歴史像の再構成につながると考えられる。

【注】

- 1) 新村出編『広辞苑』岩波書店、2008、第6版、433頁。松村明ほか編『大辞林』三省堂、2006、第3版、380頁。宮地正人ほか編『明治時代史大辞典』第1巻、吉川弘文館、2011、438頁。
- 2) 安彦忠彦ほか編『新版 現代学校教育大事典』第1巻、ぎょうせい、2002、241頁。
- 3) 三好信浩『日本教育の開国、外国教師と近代日本』福村出版、1986、4頁。
- 4) 同上、149-150頁。
- 5) 同上、150-167頁。
- 6) 同上、190頁、197頁。
- 7) 武内博編著『増補改訂普及版 来日西洋人名事典』日外アソシエーツ、1995、292頁、532頁。寺崎昌男・竹中暉雄・樽松かほる『御雇教師ハウスクネヒトの研究』東京大学出版会、1991、p. i。
- 8) 拙稿「日本近代化のなかのお雇い教師W. K. バルトン」『関西英学史研究』第2号、2006年12月、79-97頁。東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 部局史三』東京大学、1987、21-53頁。
- 9) 三好信浩『日本教育の開国、外国教師と近代日本』前出、242-245頁参照。
- 10) 同上、77頁、76-115頁参照。
- 11) 同上、116頁、126頁、115-134頁参照。
- 12) 同上、134-135頁、148頁、134-149頁参照。
- 13) 同上、149-167頁参照。
- 14) 梅溪昇『お雇い外国人①概説』鹿島研究所出版会、1968、69頁。同『お雇い外国人、明治日本の脇役たち』講談社文庫、2007、225頁。
- 15) 三好信浩『日本工業教育発達史の研究』風間書房、2005、620-622頁。
- 16) 同上、621頁。
- 17) 同上、623頁。
- 18) 同上。
- 19) 同上、621-622頁。
- 20) 同『日本教育の開国、外国教師と近代日本』前出、285頁。
- 21) 武内博編著『増補改訂普及版 来日西洋人名事典』前出、111頁、430頁、517頁、526-527頁、424頁。伊藤隆『日本の近代 16 日本の内と外』中央公論

- 新社, 2001, 31頁。三好信浩『日本教育の開国, 外国教師と近代日本』同上, 285頁。
- 22) 拙著『お雇い教師ヘンリー・ダイアーを介した日本・スコットランド間の教育連鎖の研究』平成17年度～平成19年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書, 2008年3月, 参照。
- 23) 三好信浩『ダイアーの日本』(福村出版, 1989)のIV-8「グラスゴウの技術教育に対してどのような影響を与えたか」。北政巳『国際日本を拓いた人々-日本とスコットランドの絆-』同文館, 1984, 127-128頁。拙稿「日英交流の遺産ダイアー・コレクション研究」『英学史研究』第38号, 2005年9月, 39-60頁, ほか。
- 24) 拙稿「日本・スコットランド教育文化交流の諸相-明治日本とグラスゴウ-」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要(教育科学)』第56巻第2号, 2010年2月, 4-13頁, ほか。
- 25) 拙稿「お雇い英国人教師ヘンリー・ダイアーの日本研究-成果と特色-」『英学史研究』第41号, 2008年10月, 39-43頁。
- 26) 「工科大学造船学教師トシテ雇入ルヘキ人物発見ノ儀ニ関シ在英加藤公使具報并ニ電報料支払方其他ノ件」『明治三十一年外国教師関係』150-151丁ほか(東京大学附属図書館蔵)。
- 27) 拙稿「お雇い英国人教師ヘンリー・ダイアーの日本研究-成果と特色-」前出, 33-56頁, ほか。
- 28) 武内博編著『増補改訂普及版 来日西洋人名事典』前出, 前書き1頁, 凡例6頁。
- 29) ユネスコ東アジア文化研究センター編『資料御雇外国人』小学館, 1975, 201-493頁。
- 30) 新堀通也編『知日家の誕生』東信堂, 1986, 77-78頁ほか。
- 31) 同上, 77頁を参考にして作成した。
- 32) 武内博編著『増補改訂普及版 来日西洋人名事典』前出, 25頁, 81頁, 338頁, 441-442頁。
- 33) 前出の注(26)に同じ。お雇い教師ではないが, 日本文化研究者のP. ローエルは『能登』ならびに『極東の魂』を刊行し, そのうち「とくに後者はL. ハーンに大きな影響を与え, 彼の来日をうながしたといわれる」(同上, 561頁)。
- 34) 同上, 81頁, 99頁, 265頁。
- 35) 同上, 118頁。
- 36) 同上, 453頁, 489頁, 493頁。
- 37) 同上, 111頁, 134頁。
- 38) 同上, 522頁, 539頁。
- 39) 同上, 31頁, 110頁。
- 40) 同上, 163頁, 283頁, 362頁。
- 41) 同上, 424頁, 425頁, 430頁, 529頁, 371頁。
- 42) 同上, 101頁, 517頁。
- 43) 同上, 131頁, 388頁, 539頁。
- 44) 同上, 233頁。
- 45) 『来日西洋人名事典』には, 「学術・教育」ならびに「医学・医療(医学教育・看護教育を含む)」という活動分野に, それぞれ614名ならびに69名の来日西洋人がとりあげられている(同上, 667-674頁)。
- 46) 『来日西洋人名事典』には, 教頭として「学校の組織と管理」に携わったお雇い教師として, 下記の6例あげられている(同上, 21頁, 27頁, 111頁, 232頁, 233頁, 478-479頁)。
- 北海道開拓使仮学校教頭T. アンチセル
 - 大学南校教頭G. H. F. フルベッキ
 - 札幌農学校教頭W. S. クラーク
 - 工部大学校教頭E. ダイヴァース
 - 工部大学校教頭H. ダイアー
 - 東京医学校教頭L. B. C. ミュルレル
- 47) 『来日西洋人名事典』には, 顧問として「為政者への献策」を主務とした来日西洋人として, 下記の20例が認められる(同上, 59頁, 77頁, 81頁, 133-134頁, 259-260頁, 260頁, 340頁, 362頁, 398頁, 406頁, 423頁, 428頁, 454-455頁, 515-516頁, 521頁, 539頁, 540頁, 540-541頁, 544頁, 560頁)。
- 大蔵省財政顧問U. エゲルト
 - 司法省法律顧問W. M. H. カークウッド
 - 開拓使医学顧問, 官立札幌病院医術顧問J. C. カッター
 - 北海道開拓使顧問H. ケプロン
 - 内閣顧問R. R. H. テッヒョー
 - 外務省万国公法副顧問H. W. デニソン
 - 神奈川県法律顧問G. W. ヒル
 - 司法省法律顧問G. H. プスケ

- 北海道開拓使顧問W. P. ブレーク
 ○外務省法律顧問T. ベイテイ
 ○海軍省顧問L. E. ベルタン
 ○警視庁顧問H. F. W. ヘーン
 ○大蔵省顧問P. マイエット
 ○大蔵省税務顧問, 横浜税関顧問J. F. ラウダー
 ○日本政府朝鮮問題顧問G. T. ラッド
 ○司法省法律顧問M. ルヴォン
 ○日本政府外交顧問C. W. ル・ジャンドル
 ○日本政府法律顧問C. ルドルフ
 ○日本鉄道会社技術顧問H. ルムシュテル
 ○外務省法律顧問K. F. H. ロエスレル
- 48) 三好信浩『日本教育の開国, 外国教師と近代日本』前出, 285頁。
- 49) 武内博編著『増補改訂普及版 来日西洋人名事典』前出, 77頁, 158頁, 278頁, 352頁。
- 50) 同上, 81頁, 107頁, 109-110頁, 128頁, 155-156頁, 162頁, 437頁, 463-464頁, 473頁, 484頁, 491頁, 352頁。
- 51) 同上, 356頁, 515頁。
- 52) 隈元謙次郎『お雇い外国人⑩美術』鹿島出版会, 1976, 20頁。石橋長英・小川鼎三『お雇い外国人⑨医学』鹿島出版会, 1969, 162頁。
- 53) ドベルグ美那子「P. ムリエの日本地図手写本—フランス語訳『官板実測日本地図』—」, 有坂隆道編『日本洋学史の研究』VIII, 創元社, 1987, 35-65頁。同「ムリエ蔵書目録と初期フランス日本学」, 有坂隆道編『日本洋学史の研究』X, 創元社, 1991, 253-287頁。拙稿「お雇い仏人教師ムリエによる日本養蚕技術の紹介」上・下, 『日本古書通信』60巻7号(1995年7月)13-14頁, 8号(1995年8月)28-29頁, その他参照。
- 54) 武内博編著『増補改訂普及版 来日西洋人名事典』前出, 11頁, 99頁。
 [本稿は, 拙稿「『帰国後のお雇い教師』をめぐる考察」(『関西教育学会年報』第38号, 2014年6月刊行予定)と重複するところがある。]

資料① 来日西洋人—帰国後の活動

氏名(生没年) 活動分野(所属・専門など)	帰国後(解約後)の活動
G. アウリティ (Giacinto Auriti, 1883-1969) 外交(駐日イタリア特命全権大使) 日本文化(美術・古典・文学研究)	帰国後、外交官を退官。「退官後はローマ大学において日本美術史を講じた。著作も多く日本文化に関したのものとして『日本文化史要綱』がある。日本文学の翻訳もあり、『平家物語』や『源氏物語』の部分訳を試みたこともある」(2頁)
C. アグノエル (Charles Haguenaer, 1896-1976) 日本文化(日本語研究)	「帰国後、パリの国立東洋現代語学校の日本語教授に就任した。1953年ソルボンヌに新設された日本語日本文化講座の教授となった。1956年『日本文明の起源』(…)を刊行した」(3-4頁)
W. G. アストン (William George Aston, 1841-1911) 外交(駐日イギリス公使館書記) 日本文化(日本語研究)	「日本の文化、とくに日本語および神道に関心を持ち、多くの論文等を発表した。当時、日本語の文法書にすぐれたものがなく、アストンの口語研究は欧米の日本語研究者に多大の示唆を与えた」(4頁)
V. G. アペール (Victor George Appert, 1850-1934) 法律(司法省法律顧問)	「滞在約8年2ヶ月にわたりフランス法等を教授し、わが国法学教育のために尽力した。さらに日本の法律制度の研究や日本文化の紹介等わが国文化の恩人といえる。1888年に刊行した“Ancien Japon”はそれの集大成である」(11頁)
J. イング (John Ing, 1840-1920) キリスト教(アメリカ・メソジスト監督派教会宣教師) 教育(東興義塾:英語他)	「イングの教えを受けた者として珍田捨巳、佐藤愛磨、一戸兵衛等がいる。イングの紹介で珍田や佐藤は彼の母校であるアスペリー大学に学んだ」(25頁)
J. H. ウィグモア (John Henry Wigmore, 1863-1943) 教育(慶応義塾大学:英米法) 日本文化(法制史研究)	「特に日本法制史の資料編纂に多大の貢献を果たした。“Notes on Land Tenure and Local Institutions in Old Japan”(1890)および“Materials for the Study of Private Law in Old Japan”(1941)はわが国の法律を外国に紹介したことで記憶されるべき業績である」(31頁)
G. B. ウィリアムズ (George Burchell Williams, 1842-1912) 行政(日本政府財政顧問)	「わが国とヨーロッパ諸国内との財政問題の調停役として活躍したと伝えられる」(35頁)
H. C. オストローム (Henry Conrad Ostrom, 1876-1937) キリスト教(長老派教会宣教師) 教育(神戸神学校:神学)	「1924年神戸神学校の教授となった。神学を教えるかわら、日本の仏教史の研究を行った」(66頁)
R. オールコック (Sir Rutherford Alcock, 1809-1897) 外交(初代駐日イギリス公使)	「著作には多くの日本関係のものがあるが、滞日3年間の体験を記した“The Capital of the Tycoon” 2 volsは、当時の日本を知るための貴重な文献としての評価が高い」(72頁)
W. ガウランド (William Gowland, 1842-1922) 冶金(大阪造幣寮技師) 日本文化(考古学研究)	「在日中古墳の研究をおこない、『日本考古学の父』と呼ばれ、また登山を好み日本アルプスの命名者としても知られている」(77頁)

<p>M. カシヨン (Mermet de Cachon, 1828-1871 ?) キリスト教 (パリ外国宣教会宣教師) 外交 (駐日フランス公使館付通訳)</p>	<p>「帰国後はパリにおいて『日本養蚕論』および『仏和辞典』を刊行した。さらにパリ万国博覧会にも出席、日本代表徳川昭武が1867年4月28日にフランス皇帝ナポレオン3世に謁見した際、通訳として陪席した」(78頁)</p>
<p>W. J. C. カッテンディーケ (Willem Johan Cornelis Kattendijke, 1816-1866) 軍事 (長崎海軍伝習所教官)</p>	<p>「日本からの海軍留学生に幾多の便宜を与えた。幕府から『開陽丸』の注文を受けた際にはその斡旋に力を尽した」(81頁)</p>
<p>J. H. ガビンズ (John Harrington Gubbins, 1852-1929) 外交 (駐日イギリス大使館書記官) 日本文化 (日本紹介)</p>	<p>「日本文化の研究に従事し、帰国後1909年から1910年にかけてオックスフォード大学において6回連続の日本に関する特別講義をおこない、それを元に1911年に“The Progress of Japan; 1853-1871”を刊行した。同書は幕末から明治にかけてのわが国の近代化を扱った研究書として評価が高い」(85-86頁)</p>
<p>W. C. キッチン (William Copeman Kitchin, 1855-1920) キリスト教 (メソジスト監督教会宣教師)</p>	<p>「帰国後、日本の学生のための英語教科書の編集に従事し『English Prose Masterpieces』全4巻等を刊行した」(95-96頁)</p>
<p>S. L. ギューリック (Sidney Lewis Gulick, 1860-1945) キリスト教 (アメリカン・ボード宣教師) 教育 (同志社, 神学: 大阪梅花女学校, 英語) 日本文化 (国民性研究)</p>	<p>滞日中「日本に関して多くの著述を刊行した。とくに日本人の国民性を考察した“Evolution of the Japanese; Social and Psychic” (1903) は多くの反響を得た。日米親善に多大の貢献を果たし、1921年から National Committee on American-Japanese Relation の事務局勤務となった。……」 「日米友情の『人形使節』として13000体のキューピッドをわが国に送った。1914年には“The American Japanese Problem”を刊行するなど、日本に関する正確な知識をアメリカ人に伝えた」(99-100頁)</p>
<p>E. キヨソネ (Edoardo Chiossone, 1832-1898) 印刷 (大蔵省印刷局紙幣図案製作) 日本文化 (美術コレクション)</p>	<p>「死に臨んで、彼が収集した1万4000点におよぶ日本美術コレクションは、故郷ジェノバ市のアカデミア・リグリスティカに寄贈され、キヨソネ博物館と改名されて一般に公開された」(101頁)</p>
<p>R. I. キルビー (Richard Jonathan Kirby, 1854-1914) 外交 (チリ駐東京領事) 日本文化 (古典翻訳)</p>	<p>「日本文学の古典の翻訳を行ない、『日本アジア協会紀要』誌上にしばしば掲載した」(102頁)</p>
<p>E. W. クラーク (Edward Warren Clark, 1849-1907) 教育 (静岡学校, 開成学校: 化学)</p>	<p>「帰国後日本での経験をまとめ“Life and Adventure in Japan”を刊行、さらに勝海舟の伝記“Katz Awa; the Bismarck of Japan or the Story of a Noble Life” (1904) を刊行」(110頁)</p>
<p>W. S. クラーク (William Smith Clark, 1826-1886) 教育 (札幌農学校初代教頭)</p>	<p>「帰国後はアメリカ各地で日本に関する講演」を行なった (111頁)</p>
<p>W. E. グリフィス (William Elliot Griffis, 1843-1928) 教育 (福井藩理化学教師, 大学南校) 日本文化 (日本研究)</p>	<p>帰国後「日本に関する講演や執筆活動をおこない多数の著作を発表し、またお雇い外国人の調査研究に専念した」(118頁)</p>

<p>W. C. グリーン (William Cunyngham Greene, 1854-1934) 外交 (駐日イギリス大使)</p>	<p>「日本の単独不講和宣言への加入, 日本艦隊のヨーロッパ派遣, 日英同盟の効力の実現等に尽力した」(121頁)</p>
<p>J. H. D. クルティウス (Jan Hendrik Donker Curtius, 1813-1879) 外交 (駐日オランダ総領事)</p>	<p>「滞日中日本語および日本文化の研究に従事し, 多くの日本関係図書の収集に専念し, 帰国後ライデン大学に託し同大学の日本学研究の基礎をつくった」(123頁)</p>
<p>E. グロッセ (Ernst Grosse, 1862-1927) 日本文化 (日本民俗, 美術研究)</p>	<p>「1908年ドイツ公使館付書記官として来日。1913年まで滞日し日本文化研究に従事した。帰国後外交官を辞し, 1926年にはフライブルク大学助教授となり日本美術および東洋美術を講義した。さらにベルリン国立博物館東洋部の設立に参画し, ドイツにおける日本文化研究に貢献した。彼の弟子の一人に日本美術研究家のO. キュンメルがいる」(129頁)</p>
<p>W. グンデルト (Wilhelm Gundert, 1880-1971) 教育 (第1高等学校; ドイツ語) 日本文化 (内村鑑三研究)</p>	<p>「内村鑑三の研究家でもあり, さらに能や狂言等日本文学古典の紹介につとめた。1960年に刊行した『碧巖録』のドイツ語訳は高く評価されている」(131頁)</p>
<p>H. ケブロン (Horace Capron, 1804-1885) 開拓 (北海道開拓使顧問)</p>	<p>「1875年5月23日に帰国, 日本に関する講演等を行なった」(134頁)</p>
<p>I. A. ゴシケヴィッチ (Iosif Antonovich Goskevich, 1814-1875) 外交 (初代ロシア函館領事)</p>	<p>「外交官事務のかたわら植物や昆虫採集をおこない, 函館近郊の博物学史上に大きな貢献を果たした」 「1865年領事を辞任し帰国, その際日本人留学生を伴ないロシア語を学ばせた」(143頁)</p>
<p>F. コワニエ (François Coignet, 1837-1902) 鉱業 (生野鉱山技師)</p>	<p>「在日中に『日本鉱物資源に関する覚書』(1874)を発表, ヨーロッパ人としては初の日本の鉱山に関する研究書として評価が高い」(158頁)</p>
<p>P. A. L. サヴァチエ (Paul Amédée Ludovic Savatier, 1830-1891) 医学 (横須賀造船所医師) 植物学 (日本産植物研究)</p>	<p>「彼は医師として忠実な仕事ぶり示したが, 植物採集にも関心を抱き日本産植物の研究にも貢献を果たした。A. ブランシェとの共著による“Enumeratio plantarum in Japonia sponte crescentium”(『日本に自生の植物目録』)がある」(163頁)</p>
<p>H. ダイエル (Henry Dyer, 1848-1918) 教育 (工部大学校初代教頭)</p>	<p>「帰国後は日本研究や日本での工部大学校での経験を生かし, グラスゴー・アンド・ウェスト・オブ・スコットランド工科大学の建設に参加した。」(233頁)</p>
<p>E. ダン (Edwin Dun, 1848-1931) 牧畜 (北海道開拓) 外交 (駐日アメリカ公使)</p>	<p>「1894年に勃発した日清戦争の際には, 両国の和平に尽力し講和条約締結に多大の貢献を果たした。1897年公使を辞任し, 1900年には新潟地方の油田開発に注目し石油事業をおこし, インターナショナル・オイル・カンパニーを設立し, その取締役就任した。のち全施設を日本石油会社に引き渡し, 日本の近代石油産業の基礎を築いた」(243頁)</p>
<p>L. デュリー (Léon Dury, 1822-1891) 外交 (長崎駐在フランス領事) 教育 (京都外国語学校他: フランス語)</p>	<p>「1877年帰国しマルセイユに居住したが, 終生変わらぬ親日家として日仏親善のために尽力した」(265頁)</p>

<p>G. ドロップァーズ (Garnett Droppers, 1860-1927) 教育 (慶応義塾大学: 経済学) 日本文化 (日本経済史研究)</p>	<p>「彼は日本経済史に関心を抱き在日中に『徳川時代に於ける信用組合の創立者』の著作がある」(278頁)</p>
<p>C. A. ネットー (Curt Adolph Netto, 1847-1909) 教育 (東京帝国大学理学部: 鉱山学)</p>	<p>「著作として『日本鉱山編』や『涅氏冶金学・上』(1884)があり、ほかに日本に関するものが多く『日本の紙の蝶々』(1888)および『日本のユーモア』(1901)等がある」(283頁)</p>
<p>N. A. E. ノルデンシヨルド (Nils Adolf Erik Nordenskiöld, 1832-1901) 日本文化 (ヴェガ号隊長, 北極文庫設立)</p>	<p>「約2カ月滞在し、その間日本に関する資料を収集・その収書はその後ストックホルム王立図書館に収められ『北極文庫』としてヨーロッパにおける日本研究にとり貴重な資料となっている」(286-287頁)</p>
<p>C. H. ピーボディ (Cecil Hobart Peabody, 1855-1934) 教育 (札幌農学校: 数学・土木学ほか)</p>	<p>帰国後、マサチューセッツ工科大学で教える。「日本からも彼のもとで多くの留学生が学んだ」(338頁)</p>
<p>J. F. O. フィッセル (Johan Frederik Overmeer Fisscher, 1800-1848) 外交 (長崎商館筆頭) 日本文化 (『日本風俗備考』刊行)</p>	<p>「1830年祖国オランダに帰り、1833年にはアムステルダムで著書『日本風俗備考』を出版した」(349頁)</p>
<p>E. F. フェノロサ (Ernest Francisco Fenollosa, 1853-1908) 教育 (東京帝国大学他: 哲学, 政治学) 日本文化 (日本美術研究)</p>	<p>「能の英訳を行ない世界に紹介した」(352頁)</p>
<p>R. フォーチュン (Robert Fortune, 1813-1880) 植物学 (日本産植物研究)</p>	<p>ロンドンの王立園芸協会の温室主任のとき来日。「日本において主として園芸植物を採集。さらに琉球諸島にも上陸し珍しい植物を採集して母国に送った。……日本関係の著作もあり、1863年ロンドンで刊行された“Yedo and Peking”は有名である」(356頁)</p>
<p>G. H. ブスケ (George Hilaire Bousquet, 1846-1937) 法律 (司法省顧問) 日本文化 (日本研究)</p>	<p>「在日中の経験をまとめた『日本見聞記』はすぐれた日本文化論として評価が高い」(362頁)</p>
<p>B. W. フライシャー (Benjamin Wilfrid Fleisher, 1870-1946) 新聞 (ジャパン・アドヴァタイザー主筆)</p>	<p>「日米友好のために尽力し日米協会の設立に参画し、みずからその副会長に就任。とくに関東大震災の際のアメリカからの救援は、彼の力によるところが多いと伝えられる」(370頁)</p>
<p>C. L. ブラウネル (Clarence Ludlow Brownell, 1864-1928) 教育 (早稲田大学, 富山県立富山中学校: 英語)</p>	<p>「日本に関して多くの論文や著作を著し、1903年には大英博物館のために日本歴史に関する仕事に従事した」(371頁)</p>
<p>A. R. ブラウン (Albert Richard Brown, 1839-1913) 海事 (日本郵船会社ゼネラル・マネージャー, 灯台船船長)</p>	<p>「1889年帰国しグラスゴーに住み、そこの初代名誉日本領事に就任し、……」(372頁)</p>
<p>P. ブリューナ (Paul Brunat, 1840-1908?) 製糸 (富岡製糸場技師)</p>	<p>「『TOMIOKASILK』の名を世界にひろめ、製糸をわが国最大の産業に育成した功績は大きい」(388頁)</p>

<p>J. ブリュネ (Jules Brunet, 1838-1911) 軍事 (徳川幕府軍事顧問)</p>	<p>「1895年には我が国から勲二等旭日重光章を授与された。日本からの留学生の面倒を見たとの理由によるといわれる」(389頁)</p>
<p>L. E. ベルタン (Louis Emile Bertin, 1840-1924) 造船 (横須賀造船所技師)</p>	<p>「日本関係の著作も多く、『日本の内乱』は1896年にアカデミー賞を授与された。さらに一時日仏協会会長を務めるなど日仏親善にも貢献した」(424頁)</p>
<p>E. ベルツ (Erwin von Baelz, 1849-1913) 医学 (東京医学校, 東京大学医学部, 帝国大学医科大学: 内科)</p>	<p>「日本文化の研究にも従事し, その詳細は『ベルツ日記』に明らかである」(425頁)</p>
<p>D. P. ペンハロー (David Pymouth Penhallow, 1854-1910) 教育 (札幌農学校: 植物学) 日本文化 (アイヌ研究)</p>	<p>「日本の植物やアイヌ研究に従事し論文を発表した」(430頁)</p>
<p>C. P. ホジソン (Christopher Pemberton Hodgson, 1821-1865) 外交 (駐日イギリス函館, 長崎領事) 植物学 (日本産植物研究)</p>	<p>「1861年にロンドンで刊行した“A Residence at Nagasaki and Hakodate in 1859-1861”は当時の日本のことを知る上にも貴重な資料といえる。なお同書は『ホジソン長崎函館滞在記』(多田実訳)として雄松堂書店から翻訳刊行された」(439頁)</p>
<p>A. F. ボードイン (Anthonius Franciscus Bauduin, 1820-1885) 医学 (長崎精得館, 大阪医学校, 大学東校) 日本文化 (上野公園創設功労者)</p>	<p>「1866年9月長崎精得館での任務を終えて帰国したが, その際日本から緒方惟準, 松本銈太郎の2人の留学生を伴った」(441-442頁)</p>
<p>J. C. ホール (John Carey Hall, 1844-1921) 外交 (イギリス横浜総領事等) 日本文化 (日本紹介)</p>	<p>「1914年退官しロンドンに帰ったが, 日本アジア協会会長として日英親善にも貢献した」(446頁)</p>
<p>J. L. C. ボンペ・ファン・メールデルフォールト (Johannes Lydius Catherines Pompe van Meerdervoort, 1829-1908) 医学 (長崎医学校: 解剖学) 日本文化 (日本紹介)</p>	<p>「1866年は日本滞在の見聞をまとめ“Vijf Jaaren in Japan”を刊行, 『日本滞在見聞記』として翻訳されている」(453頁)</p>
<p>J. B. マーチン (James Victor Martin, 1875-1962) キリスト教 (メソジスト教会宣教師) 教育 (青山学院: 英語ダイレクト・メソッド紹介者)</p>	<p>「1940年アメリカに帰り在米日本人および日系アメリカ人の教会活動を助け, さらに第2次世界大戦中は在米日本人の世話を献身的につづけた」(463頁)</p>
<p>A. H. マンシー (August Henry Mounsey, ?-1882) 日本文化 (『薩摩反乱記』著者) 外交 (駐日イギリス公使館書記)</p>	<p>「在任中西南戦争が勃発し, 彼はサトウやB. H. チェンバレン等とその状況をつぶさに観察し, のちに『薩摩反乱記』を刊行した」(473頁)</p>
<p>L. I. メチニコフ (Lev Il'ich Metchnikov, 1838-1888) 教育 (東京外国語学校: ロシア語) 日本文化 (日本歴史研究)</p>	<p>「在日中収集した日本に関する資料をまとめ, 1876年から1877年にかけて『明治維新論』を, 1881年には『日本帝国』を刊行した」(489頁)</p>
<p>E. S. モース (Edward Sylvester Morse, 1838-1925) 教育 (東京大学: 動物学) 日本文化 (大森貝塚発見, 日本陶器・建築研究)</p>	<p>「著作には“Japanese Homes and Their Surroundings”(1886)および“Japan Day by Day”(1917)などがあり, それぞれ日本語訳されている」 「遺言により彼の蔵書はすべて東京大学へ寄贈された」(493頁)</p>

<p>C. モンブラン (Comte des Cantons de Montblanc, 1832-1893) 外交 (在パリ公務弁理職) 日本文化 (日本紹介)</p>	<p>「帰国後、公務弁理職の名義でパリ駐在の弁務使に加わり、わが国外交事務を補助した」(505頁)</p>
<p>B. S. ライマン (Benjamin Smith Lyman, 1835-1920) 地質・油田調査 (北海道開拓使測量技師)</p>	<p>「日本に関する多くの論文を学術雑誌に発表、その後石炭鉱山の顧問技師として活躍した」(514頁)</p>
<p>J. J. ライン (Johannes Justus Rein, 1843-1918) 動物学 (日本産貝類研究) 日本文化 (日本地理研究)</p>	<p>「1873年来日し各地を旅行し、日本の地理・産業を詳細にわたって調査した。この結果、“Japan nach Reisen und Studien”を刊行した。さらに滞日中に日本産貝類を採集し、その研究をおこなった」(515頁)</p>
<p>V. ラグーザ (Vincenzo Ragusa, 1841-1927) 美術 (工部美術学校：彫刻)</p>	<p>「1882年8月漆工の清原英之介夫妻および清原玉女を伴って故郷シチリア島パレルモ市に帰り、日本で収集した美術工芸品の展覧会を開催した……1884年パレルモ市に私費を投じて工芸学校を創立してその校長に就任。清原英之介を漆工科の指導者として日本のウルシ技術の移植を図った」(517頁)</p>
<p>K. ラートゲン (Karl Rathgen, 1855-1921) 教育 (東京帝国大学：行政法、政治学)</p>	<p>「帰国後はベルリン大学講師、マールブルク大学教授、ハイデルベルク大学教授等を歴任し、日本経済や財政に関する多くの著作を発表した」(522頁)</p>
<p>J. ラ・ファージ (John La Farge, 1835-1910) 日本文化 (日本美術研究)</p>	<p>「日光で多くのスケッチを行ない、ボストン市のトリニティ教会の壁画の背景の構想を得たという。さらに日本における経験をもとに『画家東遊録』を1897年に刊行」(524頁)</p>
<p>R. ランゲ (Rudolph Lange, 1850-1933) 教育 (東京医学校：ドイツ語他)</p>	<p>「帰国後は日本文化および日本語の研究者として知られた」(527頁)</p>
<p>F. H. リー (Frank Herbert Lee, 1869-1957) 教育 (海軍兵学校、東京商科大学、学習院、東京帝国大学文学部：英語)</p>	<p>「著作に“A Tokyo Calendar”(1934)および“Days and years in Japan”(1935)があり、いずれも北星堂書店から刊行された」(529頁)</p>
<p>L. リース (Ludwig Riess, 1861-1928) 教育 (東京帝国大学文科大学：歴史学) 日本文化 (日本史研究)</p>	<p>「1893年賜暇を得て一旦帰国したが、その間欧州各地で日本史関係の史料の調査蒐集に務めた」(532頁)</p>
<p>M. ルヴォン (Michel Revon, 1867-1947) 教育 (東京帝国大学法科大学：フランス法) 日本文化 (日本文学研究)</p>	<p>「帰国後はパリ大学文科大学で日本文学や東洋史を講じ、1920年11月には同大学正教授に就任した。……多くの著作があるが、『日本文芸抄』(1910)はヨーロッパへのわが国の文学紹介に多大の貢献を果たした。」(539頁)</p>
<p>C. E. G. ルルー (Charles Edourd Gabriel Leroux, 1851-1926) 音楽 (陸軍軍楽隊教師)</p>	<p>「日本の古典音楽についての論文がある」(546頁)</p>

J. J. レイ (Jean Joseph Ray, 1884-1943) 外交 (外務省法律顧問) 教育 (東京帝国大学: フランス語)	「1930年帰国し, 在フランスの日本大使館の事務を囑託された。日本関係の著述や講演をおこない親日家であった」(547頁)
P. ローエル (Percival Lowell, 1855-1916) 日本文化 (日本研究) 外交 (朝鮮アメリカ大使館顧問)	「1883年春に来日, 以来1893年に帰国するまで日本各地を旅行し, 日本文化の研究に従事した。『能登』や『極東の魂』はその成果であり, とくに後者はL. ハーンに大きな影響を与え, 彼の来日をうながしたといわれる」(561頁)
J. H. ロングフォード (Joseph Henry Longford, 1849-1925) 外交 (駐日イギリス領事) 日本文化 (日本語, 日本紹介)	「1903年ロンドン大学キングス・カレッジの日本語教授」 「ロンドのジャパン・ソサエティの副会長等を歴任し, 日英親善に多大の貢献を果たした」(572頁)

[「帰国後の活動」欄の頁数は, 武内博編著『来日西洋人名事典』(増補改訂普及版, 日外アソシエーツ, 1995)の掲載頁]

資料② 来日西洋人の活動区分

ステージ 方向	帰 国 後	滞 日 中
日本向け	①日本人留学生の支援 ②人材のリクルート ③日本への支援 ④日本研究・日本紹介	①西洋の科学・技術の教育 ②学校の組織と管理 ③為政者への献策 ④日本研究・日本紹介 ⑤人材のリクルート
自国向け	⑤講演活動 ⑥教育活動 ⑦研究活動 ⑧日本事物の持ち帰り ⑨日本研究・日本紹介 ⑩献策	⑥日本事物の収集・輸出 ⑦日本研究・日本紹介

資料③ お雇い教師の紹介・推薦

氏名(生没年) 活動分野	推薦者・紹介者
J. C. カッター (John Clarence Cutter, 1860-1910?) 教育(札幌農学校:生理学) 医学(札幌病院医術顧問)	「札幌農学校二代教頭のW. ホイーラーの推薦により1878年11月札幌農学校教師として来日。」(81頁)
E. ガワー (Erasmus H. M. Gower, 1830-1903) 鉱業(佐渡鉱山技師)	「1860年駐日イギリス公使 Sir R. オールコックの推薦により日本政府雇いとなり、各地の炭坑、鉱山の調査に当たった。」(90頁)
E. クニッピング (Erwin Knipping, 1844-1922) 気象学(内務省暴風雨取調掛) 教育(大学南校:数学)	プロイセンの海軍に入り、中国・日本・シベリヤ東部を航海。1871年「東京で下船、失業中ドイツ人G. ワグネルの紹介で大学南校の数学教師となった。ついで通信省に入り海員試験掛となった。」(107頁)
E. W. クラーク (Edward Warren Clark, 1849-1907) 教育(静岡学校, 開成学校:化学)	「1871年グリフィスの紹介で来日し静岡学問所で化学等を教えたのち東京に転じ、1873年12月から1ケ年間東京の開成学校で理化学教師に就任。」(110頁)
P. G. グロース (Prosper Gambert Gross, 1820-1881) 警察(警視庁顧問)	「1876年5月東京警視庁顧問となった。彼の雇用は de F. G. E. ボワソナードの紹介によるものといわれるがその目的は主として外国人による不法行為の処理に当たることにあつたと思われる。」(128頁)
A. グロート (Adolf Groot, 1854-1934) 教育(東京帝国大学医学部:ドイツ語, ラテン語)	「ストラスブルグの高等学校教師として勤務中、日本から留学中の大沢謙二の紹介で1880年11月来日し、東京大学医学部のドイツ語およびラテン語教師となった。」(130頁)
E. コルンズ (Edward Cornes, 1842-1870) 教育(大学南校:英語) キリスト教(アメリカ長老派教会宣教師)	「1870年2月ヴァーベックの紹介で大学南校の英語教師に雇用された。」(155-156頁)
P. A. L. サヴァチエ (Paul Amédée Ludovic Savatier, 1830-1891) 医学(横須賀造船所医師) 植物学(日本産植物研究)	「故郷に近いロシュフォールの造船所において海軍一等医官として勤務中に横須賀造船所の医師として招かれ、1865年に来日した。彼の招聘に当たっては、造船長首長F. L. ヴェルニーが紹介の労をとったといわれる。」(162頁)
J. サマーズ (James Summers, 1828-1891) 教育(開成学校, 札幌農学校, サンマー学校:英語英文学)	1873年「夏に岩倉大使の紹介で開成学校英文学教師として来日、3ケ年同校で英文学及び論理学を教え、シェイクスピアの『ハムレット』を購読した。」(168頁)
E. P. スミス (Erasmus Peshine Smith, 1814-1882) 法律(日本政府法律顧問)	「1871年国防長官ハミルトン・フィシュの推薦で日本政府国際法顧問として来日。1876年まで勤務した。」(221頁)
W. G. ドヴォラヴィッチ (Wilhelm Guglielmo Dubravcich, 1869-1925) 音楽(東京音楽学校:バイオリン)	「1902年オーストリア公使であった牧野伸顕の推薦により来日し、宮内省御雇い教師に就任した。まだ未熟であったわが国の洋楽の発展のために多大の貢献を果たした。」(271頁)

<p>W. ホイラー (William Wheeler, 1851-1932) 土木 (札幌農学校: 土木工学, 数学)</p>	<p>「1876年W. S. クラーク博士から札幌農学校教授の推薦を受け, 博士とともに来日。」(437頁)</p>
<p>D. B. マッカーテー (Divie Bethune McCartee, 1820-1900) キリスト教 (長老派教会宣教師) 教育 (第1大学区第1番中学, 開成学校: 英語, 博物学, ラテン語)</p>	<p>「G. H. F. ヴァーベックから文部省雇英語教師として推薦され, 大学南校を改名した第1大学区第1番中学の英語教師に就任した。引き続き同校が開成学校となったのちも博物学やラテン語等を教えた。」(464頁)</p>
<p>C. G. マンスフェルト (Constant George van Mansvelt, 1832-1912) 医学 (長崎精得館, 京都府療病院, 大阪府病院)</p>	<p>「J. ボンベ・ファン・メールデルフォールトから推薦され1866年7月長崎養生所の医師および精得館教師となった。」(473頁)</p>
<p>A. T. L. R. ムルデル (Anthome Thomas Lubertus Rouwenhorst Mulder, 1848-1901) 土木 (利根運河改修等)</p>	<p>「1879年3月日本政府に招聘され土木技師として雇用された。彼の採用は先輩のファン・ドールンの推薦によるものとされる。」(484頁)</p>
<p>T. C. メンデンホール (Thomas Corwin Mendenhall, 1841-1924) 教育 (東京帝国大学: 物理学)</p>	<p>「東京大学で動物学を教えていたE. S. モースが彼を東京大学物理学教師に推薦し, 1878年来日した。」(491頁)</p>
<p>E. F. フェノロサ (Ernest Francisco Fenollosa, 1853-1908) 教育 (東京帝国大学他: 哲学, 政治学) 日本文化 (日本美術研究)</p>	<p>「モースによって東京大学の哲学教師に推された」。1878年, メンデンホールと同時に来日した。(491頁)</p>